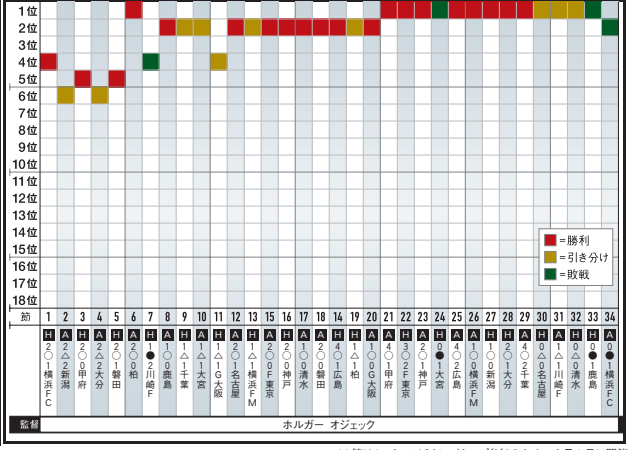


浦和レッズ

URAWA Reds



2007年年間順位 **2**
勝ち点70
20勝10分け4敗
55得点・28失点・得失点差27
ホーム 勝ち点30 8勝 6分け 3敗 23得点・14失点
アウェイ 勝ち点40 12勝 4分け 1敗 32得点・14失点



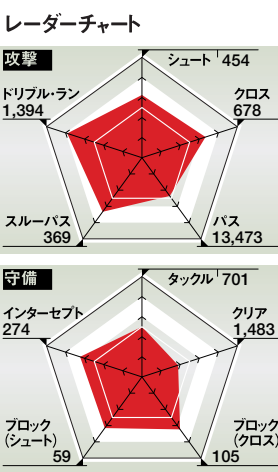
慎重な歩みが最後の最後に暗転 まさかの失速で連覇&2冠逃す

30節、2位のG大阪が敗れて勝ち点差を7に広げたが、真のライバルはその後ろにいた。同じ30節で勝ち点差を8に縮めた鹿島に、その後も猛追を受けて逃げ切れず。直接対決を含む最後の2試合で、05年7月以来となるリーグ戦の連敗を喫し、歴史的な逆転を許してしまった。

開幕前は、AFCチャンピオンズリーグ（ACL）との掛け持ちによる過密日程が、連覇への障害と見られていた。実際、日程が厳しかったシーズン序盤や終盤は影響を感じさせたが、当時

首位のG大阪を捕らえた8月など、日程が比較的楽な時期には実力を発揮して勝ち点を伸ばし、連覇に近づいていた。

今季就任したホルガー オジェック監督は、フォーメーション選択や交代策などでリスクを極力排除。疲労が蓄積した終盤は無理に勝ちを狙わず、引き分けを視野に確実に勝ち点を伸ばす慎重な歩みを続けたが、最後の最後に暗転した。ケガ人や個々の調子の低下が一度に訪れて立て直せず、ACLとの2冠の夢も消えてしまった。



バスの少なさに、数年来の堅守速攻の傾向が表れている。シーズン当初はポゼッションを重視した攻撃を志向したが、徐々に昨年までのやり方に落ち着いた流れを示すもの。阿部をDFで起用してビルドアップの力が上がったことで、クリアの数が少ない



4バックは、試合ごとに相手に合わせてフォーメーションを変えていた時期のものだが、結果につながらなかったこともあり、途中からは3-5-2で固定した。左アウトサイドは序盤は複数選手を試し、中盤以降は平川で固定して攻守の安定感をもたらした

チーム内ランキング

ゴール	決定率	バス	バス成功率	クロス	クロス成功率
1 ワシントン 16	17.0%	1 鈴木 啓太 1529	83.1%	1 ボンテ 185	37.8%
2 田中 達也 9	17.3%	2 田中 マルクス 1348	72.5%	2 山田 暢久 102	20.6%
3 ボンテ 7	13.2%	3 ボンテ 1285	70.3%	3 平川 忠亮 68	30.9%
4 永井 雄一郎 6	15.4%	4 阿部 勇樹 1262	81.9%	4 永井 雄一郎 61	27.9%
		5 山田 暢久 1243	73.3%	5 小野 伸二 54	31.5%

ドリブル	ドリブル成功率	タックル	タックル成功率	空中戦	空中戦成功率
1 ボンテ 144	59.0%	1 阿部 勇樹 81	77.8%	1 田中 マルクス 200	71.5%
2 永井 雄一郎 103	56.3%	2 田中 マルクス 79	86.1%	2 山田 暢久 158	60.8%
3 ワシントン 76	30.3%	3 坪井 慶介 74	79.7%	3 ワシントン 135	55.6%
4 相馬 崇人 62	58.1%	4 ボンテ 68	80.9%	4 阿部 勇樹 126	57.9%
5 山田 暢久 55	61.8%	5 長谷部 誠 67	85.1%	5 坪井 慶介 112	52.7%

FIXTURES

GK	DF	MF	FW
1 山岸 範宏	1 坪井 慶介	1 鈴木 啓太	1 永井 雄一郎
2 加藤 順大	2 田中 マルクス	2 平川 忠亮	2 山田 暢久
3 大谷 幸輝	3 永井 雄一郎	3 阿部 勇樹	3 相馬 崇人
	4 山田 暢久	4 長谷部 誠	4 山田 暢久
	5 都築 龍太	5 酒井 友之	5 小野 伸二
	6 都築 龍太	6 酒井 友之	6 小野 伸二
	7 都築 龍太	7 酒井 友之	7 小野 伸二
	8 都築 龍太	8 酒井 友之	8 小野 伸二
	9 都築 龍太	9 酒井 友之	9 小野 伸二
	10 都築 龍太	10 酒井 友之	10 小野 伸二
	11 都築 龍太	11 酒井 友之	11 小野 伸二
	12 都築 龍太	12 酒井 友之	12 小野 伸二
	13 都築 龍太	13 酒井 友之	13 小野 伸二
	14 都築 龍太	14 酒井 友之	14 小野 伸二
	15 都築 龍太	15 酒井 友之	15 小野 伸二
	16 都築 龍太	16 酒井 友之	16 小野 伸二
	17 都築 龍太	17 酒井 友之	17 小野 伸二
	18 都築 龍太	18 酒井 友之	18 小野 伸二
	19 都築 龍太	19 酒井 友之	19 小野 伸二
	20 都築 龍太	20 酒井 友之	20 小野 伸二
	21 都築 龍太	21 酒井 友之	21 小野 伸二
	22 都築 龍太	22 酒井 友之	22 小野 伸二
	23 都築 龍太	23 酒井 友之	23 小野 伸二
	24 都築 龍太	24 酒井 友之	24 小野 伸二
	25 都築 龍太	25 酒井 友之	25 小野 伸二
	26 都築 龍太	26 酒井 友之	26 小野 伸二

※青番号の●は途中移籍した選手
※試合=出場試合数、時間=出場時間(分)、スタスタメン回数、
[GK欄] 投入=投入回数、失=失点、失内=失点PA内、失外=失点PA外、
セ=セーブ、セ内=セーブPA内、セ外=セーブPA外、
フイ=フィード、ロン=フィードロング、ショ=フィードシュート、
[GK以外] 送出=途中出場回数、ゴ=ゴール、シュ=シュート、
バス=バス、ラス=ラストパス、クロ=クロス、スル=スルーパス、ドリ=ドリブル、
タックル、インタ=インターセプト]

攻撃の軸となったボンテのスルーパス

今季の浦和の攻撃を語る上で忘れてはならないのが、ボンテの存在だ。昨季得点王のワシントンが、負傷離脱や相手の厳しいマークなどで昨季ほどの数字を残せなかった中で、そのマイナスを補って余りある活躍。警告累積による出場停止の1試合を除く33試合に出場し、多くのゴールに絡んだ。昨季はシーズン終盤こ

そ活躍して初優勝に貢献したものの、中盤に負傷で欠場して出場数は22試合にとどまっており、物足りなさも感じさせた。しかし今季は大きなケガもなく、安定したプレーで攻撃を組み立てた。特に目立つのは、スルーパス成功率。昨季よりも出場数が増えた中で成功率もアップしており、いかに多くのチャンス

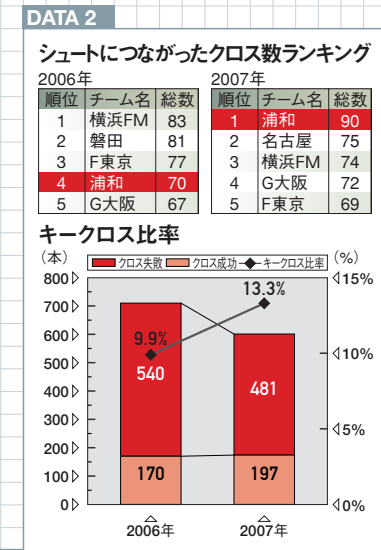
に絡んでいたかが分かる。またクロスも、成功率、本数ともに大きく増えた。サイドのスペースに流れてスルーパスを受けてから、あるいはドリブル突破からのクロスは、今季の浦和の攻撃の主要パターンとなっており、闘莉王が攻め上がった場面などで、そこからのクロスが大きな威力を発揮した [DATA 1、2、3]。

DATA 1 ポンテスタッツ

※カッコ内はリーグ内順位

	2006年	2007年
ゴール	4 (66)	7 (30)
シュート	42 (52)	53 (29)
シュート決定率	9.5%	13.2%
ゴールPA内	4 (47)	7 (21)
シュートPA内	22 (49)	24 (40)
シュートPA内決定率	18.2%	29.2%
ゴールPA内比率	100.0% (1)	100.0% (1)
シュートPA内比率	52.4%	45.3%
アシスト	10 (7)	16 (1)
キープ	43 (12)	93 (1)
クロス	86 (32)	185 (2)
クロス成功率	30.2%	37.8%
ドリブル	90 (18)	144 (6)
ドリブル成功率	68.9%	59.0%
ラン	46 (77)	111 (4)
スルーパス	58 (7)	102 (2)
スルーパス成功率	41.4%	53.9%
AZパス	454 (22)	722 (3)

特に目立つのは、スルーパス成功率がアップしたこと。昨季よりも出場数が増えた中で成功率もアップしており、いかに多くのチャンスに絡んでいたかが分かる。



今季クロス数は減少したが、失敗数を減らしたことで、成功率はリーグ1位となった。また、シュートにつながった本数は、昨季の70本から90本に増加した。

DATA 3 ポンテからのクロス受け数ランキング

順位	選手名	総数
1	ワシントン	19
2	田中 マルクス 闘莉王	9
3	永井 雄一郎	6
4	阿部 勇樹	5
5	田中 達也	3
6	堀之内 聖	2
6	長谷部 誠	2
6	小野 伸二	2
6	山田 暢久	2
9	ネネ	1

ポンテからのオープンプレーによるクロスを受け手1位はワシントン。2位が闘莉王と、闘莉王がセットプレー以外の攻め上がった場面も、ポンテからのクロスが供給されていることが分かる。

勝負どころで光った堅守速攻

28失点はリーグ最少。2位横浜FMの35を大きく引き離し、昨季に続いてリーグ最少失点を記録した (昨季は28失点。2位清水は41失点だった)。ただし、守備に関する各データを見ていくと、昨季と今季では守備のやり方に微妙な違いが表れていることが分かる [DATA 1]。特徴的なのは、各ポジションのタック

ルラインの変化だ。DFのラインはほとんど変わっていないが、MF、FWのラインが下がり、よりコンパクトなラインとなっている [DATA 2]。これは、ブッフバルト前監督が高い位置からのプレッシングを基盤としていたのに対し、ホルガー オジェック監督はボールを奪われた際、まず帰陣してから守りに入るリトリ

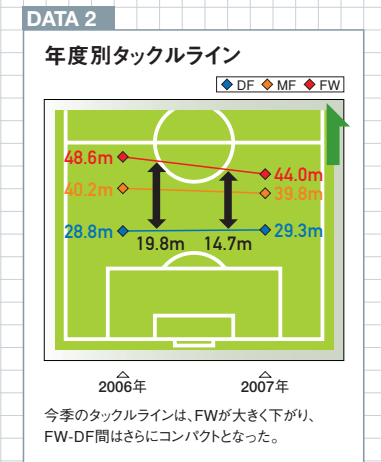
ートを基本としていたから。その分、相手に自陣まで入られる数は増えたものの、そこから個々の競り合いの強さが遺憾なく発揮された [DATA 3]。さらに、全体が下がって前線にスペースをつくることによって、首位に浮上したシーズン中盤では、堅守速攻の威力が光る格好になった。

DATA 1 被攻撃スタッツ

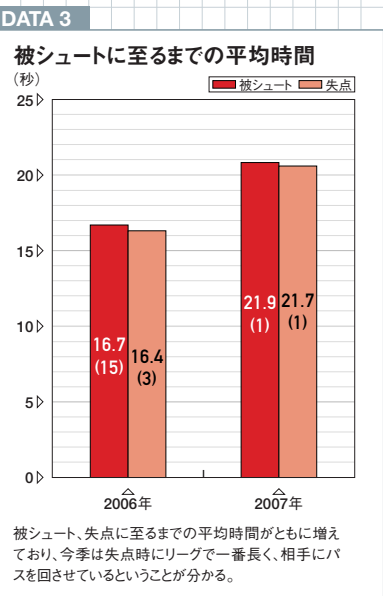
※カッコ内はリーグ内順位

	2006年	2007年
被シュート	365 (16)	400 (9)
失点	28 (18)	28 (18)
被シュートPA内比率	52.3% (7)	44.5% (18)
被シュートPA外比率	47.7% (12)	55.5% (1)
被バス	12,271 (16)	13,825 (11)
被バス成功率	75.1% (11)	77.7% (4)
被敵陣バス	7,598 (13)	8,607 (5)
被敵陣バス成功率	67.6% (8)	71.9% (2)
被クロス	630 (8)	627 (5)
被クロス成功率	17.8% (18)	19.6% (17)
被スルーパス	267 (15)	271 (17)
被スルーパス成功率	44.9% (10)	48.0% (14)
奪オフサイド	60 (18)	49 (17)
クリア	1,763 (4)	1,483 (13)
ブロック	500 (6)	600 (7)
ファウルDZ	96 (13)	70 (17)
セーブ率	76.3% (1)	79.3% (1)

ほとんどの被攻撃項目数が増加しているが、バスを除いて成功率が低い。また、奪オフサイドが少なく、被スルーパスが少ないことは、ラインが昨季同様に低いことを示している。低く守ることで、PA内からの被シュートは減少し、昨季同様、最少失点とした。



今季のタックルラインは、FWが大きく下がり、FW-DF間ではさらにコンパクトとなった。



被シュートに至るまでの平均時間がともに増えており、今季は失点時にリーグで一番長く、相手にバスを回させているということが分かる。